

宮城県加美町 廃校活用 事例発表



はじめに

学校は人が集まる場所、地域住民の方には思い出の地
その場所と思い出を引き継ぎ、新しいことを始める
心のバトンが繋がれた！

地方創生に田舎、建物、利活用というキーワードだけでは
ストーリーがなく、人が介在しない=至誠(まごころ)がない！
国立音楽院理事長・新納重臣は、二宮金次郎を地域再生人として
ビジネスマンとして尊敬し「報徳仕法」を現代版にて実践して
おります。そんな精神を実践的に体験できるのが廃校活用に関わ
る最大の魅力だと感じております！

2

株式会社 国立音楽院

1967年（創業）に東京都国立市で小さなピアノ教室から始まり、
1985年（創立）に東京都渋谷区で5学科からなる渋谷桜丘校舎開校
「音楽と福祉」「音楽を一生の仕事に活かす」をテーマに
ひきこもり・不登校だった小・中・高校生から70・80代のシニアまで、
年齢も性別も国籍も障がいの有無も不問で受け入れる音楽教育施設です。

幼児リトミック・音楽療法・楽器の製作修理/ピアノ調律・ピアノを中心と
した演奏・指導者の育成・コンピュータを使った作曲まで幅広い内容の
学びを自由に授業を選択できる仕組みで学び活かせます。
現在、東京校・南部校（鳥取県）・宮城キャンパス（宮城県）の分校
全体で396名。宮城キャンパスは65名の在校生が所属しております。

3



なぜその廃校施設に決めたのか？

国立音楽院は2013年に鳥取県南部町に分校を新設して、
地方創生に一石を投じました。
その後、全国の自治体に声掛けをするも、なかなかパートナーが
見つからない中2015年に宮城県加美町の猪股町長より廃校の
利活用として分校誘致のお話があり、
本音楽院の新納理事長と初回の面会で、
「音楽」+「福祉」+「仕事」=「人・物・お金の循環」
というキーワードがしっかりとお互いの胸のうちにあり、
タイミングと出会いが重なりあう奇跡が起きたその結果、
廃校施設で2017年4月に分校新設が決まりました。

5

2015年12月3日



なぜその地域だったのか？

☆人の魅力

体一つで東京校にいらした身軽で発想と実行力に長けた加美町の猪股町長（現職）その町長の下で具体的な施策を一手に引き受けて形にした（当時）企画財政課（現在）ひとしごと推進課・菅原係長

☆環境の魅力

東北のへそである町の立地

田んぼの中の音楽堂「中新田バッハホール」が育んだ音楽が根差す町民の

文化水準の高さ

温泉・スポーツ複合施設など人の集まるエンターテインメント性の高い観光地

☆ハイブリッドの可能性

「音楽×農業」など収入源とやりたいことが掛け合わさる人生の過ごし方・生き方を一人一人の好みに合わせてコーディネートできる可能性を感じた点

7



8

苦労した事及びそれをどう乗り越えたか

学生募集の集客

株式会社の教育施設は補助金などはなく、自力で生徒を集めて運営をしていかなくてはならないので、地盤や実績のない地域である東北で集客をするのは大変でした。

→

- ①町の地方創生に関わるPR活動（新聞広告）での知名度アップ
- ②自治体の担当職員と東北6県の高校を回り足を使った営業活動
- ③仙台の音楽関連企業とタッグを組んだイベント企画・開催
- ④SNSでの情報発信。Facebookは3,000人を越えるフォロー

9

廃校活用のメリット

人・物・お金が継続的に流動するコンセプトを自治体と企業が共有。（高齢者施設での音楽療法や乳幼児向けのリトミックを学び、町民の新生児・高齢者に提供することで、卒業生に音楽の収入が生まれる）など具体的に学んだ内容が仕事となり町で活かされる循環が生まれた。今後は、国立音楽院と東北の大学と加美町の産学官の三者がタッグを組み認知症と音楽の関係性を数値化し全国へ音楽と福祉を発信したい。我々はシンプルにそしてより具体的に、収入を増やし、支出を減らし黒字経営にする努力と、宮城キャンパスに入学してきた一人一人の学院生の夢や目標を具体的に見つけ出す人生に関わる教育機関として世界が注目する日本の地方創生をテーマにスタートが切れたこと！！

10